(別紙)

成果の説明書

(氏名)　内藤　まゆみ	(学部)　経済学部

1　重要事項

◆研究

・平成 24 年度に行った協同学習に関する研究を発展させ、集団討論における発言内容と非言語的行動との関連性について検討した。分析の手法には、発言の順序・完結性等に着目する会話分析と、頷きや視線等を測定する行動分析の 2 つを取り入れた。分析の結果、議論の活発さと視線との関連が示され、集団メンバーが全員会話に加わり、その内容が大きく発展する状況では、全員が発言者に視線を向けるといった非言語的な行動を伴うことが示された。さらに、その時間的順序を調べると、討論の進展のきっかとなる発言がなされる直前、聞き手のメンバー全員がその発言者に注目していた。つまり、発言の内容が明らかではないにも関わらず、聞き手はあらかじめ発言の“面白さ”を知っているかのように行動していた。これは、聞き手からの注目を受けて発言者の動機づけが高まり、皆の興味を引く話題を提示したとも考えられる。しかし、発言の順番取得を行った時点で発言内容は決定されているはずであり、発言者の動機づけだけが原因とはいえない。この現象は、単純な時系列関係では説明不十分であり、今後のさらなる検討が必要である。いかなるプロセスがあるにせよ、集団討論は、発言者の発言内容それ自体に留まらず、聞き手側の非言語的行動を含めた、総合的な要因によって活性化するといえる。本研究の成果は、学会発表および論文にて提示する予定である。

・認識変化における制御プロセスに関する情報収集を行った。認知療法の第 3 世代としてその効果を期待されているアクセプタンス・コミットメント・セラピー（ACT）では、否定的感情の契機となった出来事に対して、その原因を考える、反省する、将来の改善策を練るなどの「思考」を放棄し、感情そのものを「味わう」ことにより、その感情を軽減する技法を提案している。ACT は、理論的基盤として、スキナーによる強化学習の理論を発展させた関係フレーム理論を置く。しかし、ACT の効果は、フィードバックおよびフィードフォワード・プロセスという「制御」の視点を加えることでより適切に理解できると考えらえる。従来の認知理論が、いわばフィードバック・プロセスのみを扱うものであり、その点が認知療法の限界を生み出していた可能性があること、強化学習自体が、過去からの影響とともに、未来からの影響を含めていると言えること、これらをふまえると ACT におけるフィードフォワード・プロセスの考慮は妥当と判断できる。そこで、認知療法の文脈における制御プロセスについての文献調査を行った。

◆社会貢献

日本パーソナリティ心理学会大会活性化委員として、大会発表賞の選考に関わる活動を行った。

2　その他の事項

3　次年度以降の計画・抱負

来年度は制御プロセスの観点から ACT を捉え直し、その効果を検討する。フィードバック・フィードフォワードのプロセスは、電子工学、生物学等の領域で理論化され、心理学においても視覚などの神経学的アプローチを用いる領域で想定・検討されている。

しかし、認知療法の領域では関連理論を見出せない。認知過程に関する従来の研究手法は、刺激→反応という、いわばフィードバック・プロセスを検証するためのものであり、フィードフォワード・プロセスの検討には適切または倫理的ではない。その検討のためには新たな研究フレームワークが必要である。平成 24 年度、25 年度に行ってきた質的研究の手法は、それに資すると期待される。そこで、今年度は否定的感情の軽減におけるフィードフォワード・プロセスの効果に関する文献調査を進めるとともに、その効果に関する質的データの収集・分析を試みる。